

授業中

葦牙 / 1990.1.1.

石塚秀雄

なつかしい落語に「授業中」というのがあって、「山のあなあな…あなたもう寝ましょうよ」というところでどっと笑いを取っていたものである。いかにおもしろく話しをするのかということについては、いつも腐心するところであるが、授業が終わると気持ちが落ち込むことが多い。以下は、私の「授業中」に感じたいくつかのことである。

私が持っている国際文化関係の10名程度のクラスの大学生に尋ねたところ、1名を除いて全員にどうしても食べられないか食べたくない嫌いな食べ物があることが分かった。特に嫌いなものはないと答えたのはアメリカ人留学生であった。食べ物の好き嫌いというのはどういう原因によるのか科学的な理由は知らないが、好き嫌いが無いという日本人学生が皆無というのはちょっと問題ではなからうか。個性尊重といえは聞こえはいいが、要は我侬、野放図に育てられたにすぎない。小市民的価値観も良いところである。こんなことを言っていると古くさい奴だと言われるのがオチであるが、平気である。

私「少なくとも外国に行ったら現地の人食べているものを試食すること。この努力なくして異文化理解はない」

学生「食べられないものは食べられないじゃないですか。無理に食べさせるとアレルギーで死んじゃうこともある」

私「こつは、初めらかカブリといくんではなくて、ナイフやスプーンでちょっとだけ取ってまずは試してみる。なんだか分からないものをいきなり食べとは言っていない」

以前、小学生に自宅の食事風景を絵に描かせるという調査の分析の議論をしているときに、次のようなやりとりがあったことを思い出す。50代のオジサン研究者が、「家族揃って食べない家庭が増えていて問題だね」と言ったら、30代の女性研究者から「なぜ、家族一緒に食べなければいけないんですか」と反論が出たので、私は一種のカルチャー・ショックを覚えた。確かに、データは、家庭内で各人が好きな時間に、自分の好きな主食とおかずをそれぞれに食べている家庭が増えていることを示している。私はこれを否定的な傾向として捉えていたが、そう考えていない人もいたのである。だから「好き嫌いをなくせ」などと主張するのは守旧派も甚だしいのかもしれない。この差異はの要因は、世代、階級、文化のいずれの要因が大きいのであろうか。学校給食でも牛乳と蕎麦とか、おかずの訳のわからない取り合わせなども、変な食べ方の原因のひとつであらうか。

若者は意外と常識的な枠組みの思考をしているものである。物事に正しい疑問を感じる、あ

るいは問題意識を持つという点においては齒がゆいことが多い。

異文化コミュニケーションには「ロールプレイ」というものがあり、老人や障害者や外国人の立場というものを設定して、限定されたシチュエーションでその役割に成りきって演技してその立場を理解するという方法であるが、これも教育の中で安易に採用されていると思われる。他者の気持ちなどの自己以外に対する想像能力が低い者たちには、そうした体験が必要なのだという説明があるのかもしれない。また、老人の状況を体験するために、曇り眼鏡を掛け、脚や腹に重量のあるサポーターを巻いて歩いたり、盲人を体験するために目隠しして歩道を歩くなどのことが行われているようだ。いつから人々はそんなにも単純になってしまったであろうか。そんな風に「実感」できなければ、(普通でない)異なる他人を理解することができないのであろうか。そこには安易な「共感」があるだけで、それは都合の良い誤解である。分かったつもりで安心が得られるだけである。

障害者(健常者などという言い方は傲慢だと思う。障害者を中心にして考えるならば健常者と言う代わりに、非障害者とか障害可能者という呼称が良いのではないか。以前、「精神病患者」と書いたら「知的障害者」と訂正された。勉強のできない者を指して学習障害者と呼ぶようだ。犯罪を犯した者の一部は「犯罪障害者」と呼ばれている。なんでも、問題がある人はすべて「障害者」と言われそうである。私は「わが家は代々『経済障害者』の家系である」と言っているが、これで笑いを取れたことはまだない。) に対してだけではない、他者の存在などを簡単に理解できるものであろうか。

他者や異文化とは容易に理解しがたいものであるということ、ソクラテス風に言えば「私は知らないということを知っている」という自覚や謙虚さがなくて、いくつかのキーワードと手続きを踏めば、物事が分かると考えがちな学生が、ロールプレイなどのメソッドを使っても、自分の想像力の不足を糊塗するに過ぎず、かえって理解ということがら悪化させることになるであろう。これに文化多元論などが加わると、まさになんでもありの世界、またなんでも理解したつもりの世界になってしまう。なにか、簡単なメソッドを与えたら、物事がすっきりと理解できるという考えが蔓延していることに非常な危惧を覚えるのである。

もうひとつ気になるのは、学生にわれわれの考えの枠組みが欧米化されていることに対する自覚が弱いことである。それは学生だけではなくて、教える側はもっと根深いかも知れない。たとえば、論文の書き方一つを見ても、基本的には英語圏での論文の書き方を基本にする傾向が強い。文体は思考を決めるものである。たとえば英語と日本語の違いは、世界観の違いでもある。時間や空間の捉えかたの違いがある筈である。日本語の論文を英語に訳すことがあるが、これが非常に難しい。私の語学力ということもあるが、なによりも英語にならない論旨の運びが多いのである。それはかならずしもその論文の文体が論理的でないということではない。ここをもって、日本語には論理がないとか言う人がいるが、決してそうではないと思う。それはやはり文化の違いなのである。日本的な論旨の筋道は、欧米的ではない。逆を考えるとわかりやすい。たとえば、内村鑑三の『余は如何にして基督信徒となりし乎』とか『代表的日本人』などの翻訳文体を見れば、原文が英語で書かれたこれらは本来の日本語的表現ではない。つまり翻訳日本語である。つまり異文化の論理がベースに見られるのである。

明治以降、日本の空間観と時間観は欧米の枠組みを採用している。そうした枠組み導入のた

めに如何に先人が試行錯誤したか、あるいは苦闘したかという、一種の異文化受容の過程を理解することが、今改めて必要な気がするのである。

食物とは極めて保守性の強いものである。「開かれていない」地方ほど、その傾向が強いようだ。ちなみに半年前にわが家にホームステイしたスペイン人青年は、カレーライスを初めて食べたと言った。日本のカレーライスは地方性の強いものであるので当然と言えるが、つまりインド料理も食べたことがないということである。

ヨーロッパのことを種にして糊口を凌いでいると、私のことをヨーロッパ最良で、日本よりも好きなのではないかと訊く人もいる。「将来はあちらに永住するではないんですか」などと言われる。以前、通産省がスペイン南岸のコスタデルソルあたりの保養地に日本の定年退職者たちが住むように宣伝をしたことがある。このように外国で豊かな老後を過ごせる人たちの条件とは、財産に余裕のあること、また異文化の中に入っても平気な人たちでなければならないだろう。まあ通産省のOBを想定していたのであろうか。異文化の中に入っても平気というのは二種類ある。一つは、異文化に溶け込めるということであり、もう一つは異文化にまったく溶け込まないということである。受容できるのか無関係でいるのかである。

団体ツアーで海外にいくと、同行の仲間にはいろいろな人がいる。現地の水も食べ物も体質的に受け付けないのか、あるいは警戒心が強いのか、一週間位になると弱音を吐いて、「オリーブ油がきつすぎる」とか「ラーメンや寿司が食べたい」とか言う。こういうタイプの人には「日本の食べ物が世界で一番旨い」などと単純なことを言いだす。誰だって、自分が小さいときから食べている食べ物が一番旨いに決まっている。この考え方を「エスノセンティリズム」と言ったりするが、自国文化中心主義が排他主義とリンクして現われる。こんな分かり切ったことをなぜ筆者が言うのかといえば、実はこの単純な思考が、難しそうな議論の中でも常に繰り返し、いろいろな所で現れることが依然として多いからである。